Project

Ways to End Public Art Relight Project 2: Recollection 回想

by

目次

03 Relight Committee
社会彫刻家として生きる
– Relight Committee 2015
– Relight Committee 2016
– Relight Committee 2017

17 「3.11が■■ている。」
それぞれの中に息づく東日本大震災
– 配布資料の変遷
– 記入された「3.11が■■ている。」ワークシート

25 笄小学校
小学生たちが見た Relight Project
–「リライトプロジェクトのみなさんへ」
– Relight Days チラシ
– 学級通信
– Relight Days 感想

社会彫刻家として生きる

Relight Project では、ヨーゼフ・ボイスが提唱した「社会彫刻」の概念を現在の視点から捉え直し、「アートが持つ創造性や想像力を用いて、自らの生活や仕事に新たな価値をつくり続け、行動する人」を社会彫刻家と定義。

さまざまな領域において社会彫刻家が増えることで、社会はより豊潤な場所になっていくという考えのもと、社会彫刻家の輩出を目的とした少人数制の市民大学「Relight Committee」は生まれた。

社会彫刻家としてどのような Action を起こすのかといった行動計画のプランニングや、『Counter Void – 光の壁 –』を再点灯させる「Relight Days」に向けた企画立案、社会彫刻家を招いた多角的なディスカッションなど、多彩なプログラムを体験してきた受講生たち。

Relight Committee での活動は、彼らに何を考えさせ、どんな影響を及ぼしたのか。2015年から2017年までの3年間で Relight Committee が輩出した30人余りの社会彫刻家の中から、9名のメンバーにアンケートを実施。その思いを聞いた。

Relight Committee 2015 メンバー

青山裕美
Aoyama Yumi

五味春佳
Gomi Haruka

長谷川一英
Hasegawa Kazuhide

橋本隆一
Hashimoto Ryuichi

細谷杏奈
Hosoya Anna

井上愉可里 *
Inoue Yukari

岩田康宏
Iwata Yasuhiro

木村茂
Kimura Shigeru

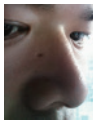
北川義樹
Kitagawa Yoshiki

室内直美 *
Murouchi Naomi

宍甘央治
Ohji Shishikai

大平和幸
Oodaira Kazuyuki

大平竜
Oodaira Ryu


辻隆公
Tsuji Takahiro

富樫尚代 *
Togashi Hisayo

戸塚愛美
Totsuka Manami

山上祐介
Yamagami Yusuke

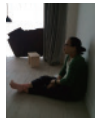
Relight Committee 2016 メンバー

江口恭代 *
Eguchi Yasuyo

江崎日淑
Esaki Hisumi

藤井周
Fujii Makoto

松葉有香 *
Matsuba Yuka


関恵理子
Seki Eriko

田島悠史
Tajima Yushi

高木萌子
Takagi Moeko

山田悠 *
Yamada Haruka

Relight Committee 2017 メンバー

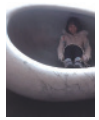
荒川真由子
Arakawa Mayuko

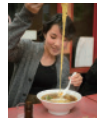
荒生真美 *
Arao Masami

江口恭代
Eguchi Yasuyo

細田東男 *
Hosoda Haruo

日向貴之
Hyuga Takayuki


金江理紗 *
Kanae Risa


松本麻美
Matsumoto Asami

松村律子
Matsumura Ritsuko

坂田由美
Sakata Yumi

わたなべめぐみ
Watanabe Megumi

* アンケート回答者

Relight Committee 2015

井上愉可里

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

2014年秋、菊池宏子さんの子供向けワークショップにボランティアで参加したときに、その内容がほかでは感じたことのない、おもしろく興味深い内容で、今思えば子供一人一人が「社会彫刻家」である、という意図があったのではないかと思うが、とにかくそのワークショップに衝撃を受けて、ぜひなにか一緒にやりたいと思ったのがきっかけ。

その後、2015年7月に行われた Relight Salon で、ヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」また、長嶋りかこさんの「光の学校」を知り、日ごろから関わっている「子ども」と「アート」を繋げること、さらにそこに地域をどう組み入れていくかのヒントが隠されていると直感的に感じ、Relight Project に参加しようと決意した。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

①2015年11月～12月、Relight Days 2015 2日目昼のワークショップを企画・運営するグループが Relight Committee 内に結成され、Relight Days においてチームとしてどのような企画にするかを検討したとき。チーム全体のテーマが「memento」と決定し、対象のイメージも固まった。

②港区立笄小学校と Relight Committee でコラボレーション授業が行われたとき。また小学校の児童が自主的に「3.11が■■ている。」のワークショップを行ったと知ったとき。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

①②どちらも、活動の輪が一つ外に広がったときだから。

①は、それまでは「生と死」をテーマにひとりで企画を考えていたが、このときにグループで企画を詰めていく段階に入り、協働的な活動となった瞬間だった。混沌とした個人の頭の中にあったイメージが、異なるものと出会い、形を変えて現れた。

②は、Relight Committee の中で閉じていた「社会彫刻家」としての活動が六本木の街に波及した象徴ではないだろうか。ここには、ひとりの「社会彫刻家」の存在がいる。笄小学校の図工教諭江原先生である。江原先生が Relight Committee と子供を繋げたように、この活動を続けていれば、どこかにいる横軸を通す存在となる「社会彫刻家」と出会う機会が増えて、広がっていくのだと気づいた。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

私はものづくりを通して「表現することの楽しさやおもしろさ」を小さいころから味わってきた経験があるので、その楽しさを子供たちに伝えたい。表現することが苦手だと思っている人も、さまざまなことに困難を感じている人も、誰もが楽しんで表現ができるよう、私自身さまざまな知識を得て安心して参加できる場を作っていきたい。

「社会彫刻家」はその名の通り、「社会」すなわち「他者」との関係性の中で成り立つものだと思う。今後の活動のひとつひとつがその社会や誰かを思い描きながら活動することを意識していきたい。

井上愉可里

ワークショッププログラム開発兼講師、グラフィックデザイナー。武蔵野美術大学にて空間演出デザインを専攻。小さい頃から手を動かしてつくることが好きで、創造・表現の場づくりに興味を持ち、以来子ども向けワークショップの企画開発・講師を務める。現在は合同会社デジタルポケットで、プログラミング言語「ビスケット」の開発・普及を行いながら、指導者を育成する講師も務める。

室内直美

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

小学校まで港区に住んでいたこともあり、地元港区で行われるアートプロジェクトがあれば参加したいと考えていました。そんな折、Relight Project の前身となる「光の蘇生」というプロジェクトがあることを知り、勉強会に参加。もともと作者である宮島達男さんのファンだったこともあって『Counter Void』再生のプロジェクトにはなんらかの形でかかわり続けたいと思っていました。Relight Project がスタートしたあともなおかかわり続けたい意志を表明し、Relight Committee のメンバーになりました。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

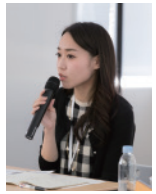
Relight Committee 2016の第8回活動日でのでき事が強く印象に残っています。メンバーそれぞれの Action プランがプレゼンテーションされていく中、ただひとり Action を決めきれず、「生と死」というテーマを自分自身に引き付けられないでいたあるメンバーのプレゼンテーションに、ほかのメンバーからの厳しい意見が飛び交う中、私は発表者である彼女の心情に強く共感してしまい、彼女ではなく私が泣き出してしまったことがありました。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

発表者であった彼女は、本当は「生と死」を自らに引き付けられなかったのではなく、引き付けて考えた結果、それを自身の Action にはできないと判断したのだと私は感じました。「生と死」をテーマにした時、それを他者に向けて表現する行為は誰もができることではありません。またそれを迫るのはある種の暴力的な行為であるとその時感じました。アートプロジェクトの活動の中でこれほどまでに辛い思いをすることがあるのかと、とても衝撃を受けたことを今でもよく覚えています。Relight Committee は Action の実行を強制するプログラムではないので、彼女は最終的に Action をすることはありませんでした。「Action をしない」と決断した彼女の判断は、間違いではなかったと今も確信しています。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

Relight Committee 2016のメンバーの Action に触れ、2017メンバーの Action が具体化する過程に伴走している今、自分の心の内を他者に伝える強さはときに誰かを傷つける凶器にもなり、自分の心の内を隠そうとする弱さは同じ気持ちをもつ人を守る盾にもなると感じています。そして、私自身はその盾を持つ側の人間だと思っています。アートの現場に関わる者として表現するという行為を支えるとともに、表現できない人にも寄り添い、その弱さ、脆さを肯定できる社会彫刻家でありたいと考えています。



室内直美

Relight Committee2015に受講生として参加。毎年変化し、進化し続ける Relight Project と、Relight Committee のプログラムに興味があり、2016年度は新メンバーのサポートという形で関わる。2017年度より、Relight Project を運営する NPO 法人インビジブルのスタッフとなり、Relight Project 担当としてプロジェクト全般の運営、進行管理を担当。

富樫尚代

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

65歳で日本フィルを退職し、音楽業界という狭い世界から距離をおき、アートと社会という領域で、自分の経験をどう生かすことができるのかという好奇心から。また、さまざまな年齢層の集まるコミュニティに参加することに興味があったから。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

やはり『Counter Void』が点灯された瞬間の感動、興奮。この活動に参加できたことの幸せを感じました。（手前味噌になってしまいますが）『Counter Void』前のバッハの無伴奏チェロ組曲の演奏と宮沢賢治の『春と修羅』の朗読です。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

個人的には東日本大震災後、「被災地に音楽を」送る活動を通じ感じてきたさまざまな地域の復活、再生の願いやエネルギーを、『Counter Void』が生き返った荘厳さのなかに感じました。そして Relight Committee の若いメンバーとともに議論を重ね、プロジェクトが実現したことです。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

足腰が元気なうちは色んな社会を見て歩きたい。出会った人たちと対話をし、おもしろいことを思いついたら、一緒にやろうと呼びかけたい。Relight Committee に参加し3年間で学んだことが自信となり後押ししてくれています。

富樫尚代

1950年9月12日生まれ（インビジブル菊池宏子さんと誕生日が同じ！）。岐阜県出身、法政大学法学部政治学科卒。1975年、日本フィルハーモニー交響楽団入団。社会とオーケストラをつなぐ窓口の音楽の森セクションに所属。2015年、定年退職後もアドヴァイザーとして継続してエデュケーション部門と被災地支援の活動を行っている。

Relight Committee 2016

江口恭代

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

きっかけは Radio で流れた「思考と技術の対話の学校 *」の案内でした。アートを学べる学校があるとそのとき初めて知り、すぐに説明会に申し込みました。ところが当日説明会会場を間違えてしまい、参加できずじまい。他にアートを学べる機会はないかと探してみたところ、幸運にも Relight Committee を見つけることができました。まさに巡り合わせを感じました。東日本大震災という言葉に強く導かれるものを感じる一方、宮城県の生まれでありながら震災当時は愛知県に住んでいたこともあり、私にとって震災はどこか実感が湧かない他人事のようでした。東京に暮らすようになってからだんだんと震災に向き合えていない自分自身に疑問を持つようになりました。そんな自分自身に Relight Committee を通して向き合っていきたいと考え、参加を決意しました。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

やはり昨年2017年3月11日の自分自身の Action、「心の声 祈り ここから新たに」の実施日当日です。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

Action 当日、震災の起きた時刻と同じ14時46分、宮島さんの『Counter Void』再点灯と共に私たちも「花は咲く」を歌いながら六本木を歩き出しました。今、振り返ってみるとあの日は不思議な一日でした。なにか自分の力だけではなく、見えない力が助けてくれていたように感じます。まるで巡礼や修行のように六本木を白い衣装をまとい、花を持ち歌いながら歩く行為をしましたが、Relight Committee の仲間や当日来てくれた方の笑顔などが輝いて見えました。役目を終えた花を1本渡しただけでとても喜んでくださる方がいて、そうした温かい気持ちを沢山感じることができたことや、宮島達男さんの講演会で偶然にも歌わせて頂くことができたりと本当に幸せな1日になりました。自分が抱えていた罪悪感が浄化されたかのような1日でした。祈りは通じたのかもしれないとそう、思っています。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

私は昨年に引き続き、今年も受講している唯一のメンバー。受講を決めたのは Action を実施後、数ヵ月後に代官山を学生時代の友人と歩いていた際に突然、見ず知らずの女性から「あのとき六本木で歌われていた方でしょう？ これからも頑張ってくださいね」と声をかけられたことがきっかけでした。まさか自分の祈りが届いた方とこうして出会えたこと、その思いを大切にしたいと感じ、受講を決めました。

２年目ということで多少のプレッシャーを感じつつも、Relight Committee を通して学んだこと、出会えた人達は一生の宝と感じています。

「社会彫刻家」とは日々、どのように生きていくのかまさに生きていく姿勢・生き方そのものだと思います。哲学など思考すること、考えることは人間らしく尊く感じます。考えながら行動すること、歩き続けること、自分の思いに正直であることなど容易ではありませんが、自分の心・思いに正直に人にたとえ理解してもらえなくてもまっすぐに生きていきたいと強く思います。一生、「社会彫刻家」を目指して生きていきたいです。

* アーツカウンシル東京 Tokyo Art Research Lab（TARL）が提供する、アートプロジェクトの人材育成プログラム

江口恭代

宮城県仙台市出身。現在は外資系企業に秘書として勤務。再生医療の研究室秘書、外資系ホテルフロントなど、これまで約７社にて勤務。小学生の頃に読んだ『不思議の国のアリス』をきっかけにイギリスに魅了されて以来、海外（特に欧州）に興味を持ち、様々な国の人と出会うことに喜びや自由を感じる。大切にしている言葉は、星の王子様の「大切なことは目に見えない」、「人生は神様からの贈り物」。

松葉有香

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

異なる世界に足を踏み入れたい。普段ガチガチ左脳派の人たちの中で過ごしている私は、もっと振り切れたかったのです。正反対の、右脳派の人たちと一緒に過ごしてみるといいのではないか？ そう思ったのがキッカケでした。

また、私はそもそも社会彫刻家という言葉やアートについてほとんど無知でした。「アート＝絵画」という短絡的な理解ではなかったですが、では実際なんなのかと聞かれるとわかりませんでした。アートとはなんなのか。それを知りたいという好奇心もありました。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

『Touch Sanitation Show』（Mierle Laderman Ukeles, 1984）を紹介されたときです。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

私の中の「アート」が広がった瞬間だからです。ゴミ処理をしている作業員たちと握手している写真を残すという、たったそれだけのパフォーマンスですが、これを見て「そうか、アートとは見て楽しむだけではなく、見る人の考え方にまで作用するものなのだ」と思ったのです。常識を逆行する様子を見せることで、人々は自分の中の凝り固まった「変な常識」に気づくのでしょう。それに気づいてもらいたいという思いが込められているという意味で、アートとは訴えなのだと感じました。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

私は、社会彫刻家を「社会に、人の心に、新たな風を刻み込む者」と定義しています。常識をいい意味で疑ってほしいのです。だから、人々の心の中にある「常識」＝「無意識な諦め」をなくし、新たな一歩を踏み出すキッカケを与えたいと思っています。そのために、「可能性」を伝えていきます。

世の中には本当に楽しいことばかりなんです。新しい経験、新しい縁。たくさんたくさん溢れていて、それらを見逃さずにキャッチしていくと、本当に暇なんてできないんです（笑）。私にとってはそれが幸せで、生きているって感じること。もちろん私と同じようにせわしなくアクティブに動けって言ってる訳ではないですが、経験してみないと自分に合う・合わない、できる・できないってわからないと思うんです。そしてそもそも、まずはその経験の存在を知らないと経験すらできないんです。だから、私自身のストーリーだけでなく、色んな人のストーリーを伝えることで、まずは様々な経験の存在を伝え、軽い気持ちで「やってみなよ」と興味を与えることができたらいいなと思っています。それで誰かが「私もできるかも」と感じて、その人の経験になれば、もうそれだけで幸せです。

誰でも何歳になっても、遅いということはない。なにもない0から自分で始めるのは難しいですが、誰かの模倣なら不安も減る。私もそうでした。だからそんな不安を減らして、踏み出す一歩を軽くするお手伝いを、これからずっと続けていきます。

松葉有香

右脳と左脳のバランスがいいらしい理系女子。思いある人の「ストーリー」を言語化して人の魅力を最大化する「ストーリープロモーション」を得意としている。「可能性を伝える」が使命。Relight Committee 2016 では「wakuwakucollection」という Action を行い、人々のワクワクを集めて可視化した。

山田悠

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

私が Relight Committee 2016への参加を決めたのは2016年の春です。2015年の秋に、5年間のフランス滞在を終えて日本に戻りました。生活の場所が変わり、周囲の環境が変化する中で、改めて「私はアーティストとして日本でどのように生きていくことができるだろうか？」と、自身の社会の中での立ち位置について考えていました。

それまでの海外生活では、目の前のものごとに対して第三者として振る舞い、また自身の作品制作にあたっても、同様の姿勢を取ってきました。しかし日本に帰国し、東京へ戻って来た時に、自分と社会との関係性が変化したことに気がつきました。それまでの余所者としての立ち位置ではなく、対象と自分自身がどこかつながっている、自分の一部であるという感覚がありました。このことが、社会の中でのアーティストの立ち位置を今一度考え直したいという気持ちにつながり、参加を決めました。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

特に印象に残っているのは、Action に向けた各回のプレゼンテーションと議論の時間です。自身が行うことも、他のメンバーの話を聞くことも、とても緊張感があり刺激的な時間でした。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

Relight Committee にはさまざまな分野で活躍している参加者がおり、アートを学ぶための学校とは少し違いました。アート作品のプレゼンテーションや、それに対する議論の経験はありましたが、Action について、さまざまな解釈の可能性が平等に存在する場で議論をしあえたことはとても新鮮な経験でした。自分の考えがどのように伝わるのか、もしくは伝わらないのか、異なる尺度を持った人々とやりとりができたことはとてもおもしろかったです。粘り強い議論と対話の経験から、アートがアートを飛び越えて、現実世界でものごとを起こす瞬間を目にすることができました。

また議論の中で、不完全なコンセプトを開示するというプロセスがあったこともとても印象的でした。作品をつくる多くの場合、ある程度のところまで考えやコンセプトがまとまった段階で初めて人に見せるということをします。しかし Relight Committee では、まだアイデア以前の、何かが頭の中でひっかかっているという状態から、他者にそれを開示していくことになりました。途中段階のものを受け止めてもらう、そしてそこで生まれる反応を再び自分が責任を持って引き受けていくということは、私にとって新たな制作のプロセスでした。そのことは、Relight Committee のプログラムの意図するところではなかったのかもしれませんが、不完全である自分自身を公の場で認める作業、そしてまた他の誰かとつくりながら考えていく作業は、私にとってひとつの発見となりました。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

私はこれからも可能な限り、アーティストとして活動を続け、作品をつくっていきたいと考えています。作品をつくる上で、作品そのものについてのみイメージをするのではなく、その作品の存在する社会はどのようなものなのか、というところまで想像力を広げていきたいです。そのためにもっと多くの経験を積み、精進をしていきたいです。

山田悠

アーティスト。フランスのディジョン国立高等美術学校で2012年に空間デザイン、2014年にアートの過程を修了。2015年に日本に帰国。ふたつの異なる領域での学びを通じ、変動する都市環境の中で自らの行為をどのようにアート作品として成立させることが出来るかについて関心を持ち、都市・自然・人間の関わりに注目した作品をつくる。

Relight Committee 2017

荒生真美

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

私は2児の母である。ひとり目は元気な男の子、ふたり目は超未熟児として生まれ24時間看護を必要とする気管切開児で難聴というハンディキャップを抱える女の子。この13年間は命を守るために走り続けてきたような感覚。が、2017年春、娘がいくつものハードルを乗り越えて元気に小学校に通うようになった。少し肩の力が抜けた。そして、ふと、これから自分は何ができるのか、したいのかを考える余裕ができてきた。これまで育児に追われても「時の蘇生・柿の木プロジェクト」というアートプロジェクトに参加してきた。それは心を支えるものであり、絶対に手放したくなかったアートとの繋がりだった。そのアートというフィールドで何ができるのか。さらに息子や娘の成長過程で今まで見えなかったもの、知りえなかったものとのかかわりを持つようになった母としての経験は絶対に糧となっているはず、今まで感じてきたこと、今感じていることをそのまま流し去りたくない……。同時に親としての固定観念を打ち破りたい……そんなぐちゃぐちゃした思いを抱いていた時に、Relight Committee に出会った。そして私は流れに身を任せず、一時停止する場として参加を決めた。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

Relight Committee は月1回の刺激的な学びの場である。交差するはずのないジャンルの人や世代が混じり、思いもよらなかった疑問や回答を知るカラフルな場。いつも濃厚な時間だが、また仲間とやりたいと感じたのは、「観光」をテーマにした学びである。観光とアートの相似と相違。日常を異化するアートの力。その学びの実践がふたつのインストラクションによる観光だった。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

ひとりでは選択候補にも挙がらない、どちらかといえば排除するような場所に敢えて行き、気づかなかったきらめきを感じた時、少し日常が豊かになった。さらに仲間たちのインストラクションのこなし方に驚いた。創意工夫があり、うならせた。私には足りないものをまざまざと見せつけられて、心が揺れた。毎回毎回、頭がいっぱいになって家路についた。その温度を家族や友人に伝えるのに四苦八苦してばかり。7月からそんな日々を過ごすようになり、やはりアートは心を支え、日常を豊かにする力があると実感している。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

私は「社会彫刻家」になれるだろうか？その問いはこれからずっと続くのだと思う。

ただ、私は人とのかかわりを怖がらず、自分を閉じずに社会と関わっていきたい。そして偏らずフラットな「社会彫刻家」になろうと思う。そのためのバックグラウンドはこれまでの出会いの中できちんと備わっている。今まで続けてきたアートプロジェクトはこれまで通り関わり続けていくだろうが、社会とアートをつなぐ場で「私」の力が役に立つのなら惜しみなく動いていきたい。「これから何をしたいか」という問いは時間の経過とともに、「どう生きたいのか」という問いに変わってきている。

荒生真美

静岡県生まれ。大学にて芸術文化、おもに西洋美術史を学ぶ。1999年より長崎で被爆した柿の木の苗木を子どもたちと植えるアートプロジェクト「時の蘇生・柿の木プロジェクト」の実行委員となり現在に至る。その後、原爆投下の地である長崎やメキシコでの生活を通して、開かれたアートに強く関心を抱くようになる。2児の母。下の娘が超未熟児で生まれ、生と向き合う日々。生きること、それを彩るアートの力を実感している。

細田東男

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

もうすぐ56歳になるという6月の下旬に Relight Committee 2017の募集を知った。そして惹きつけられた「社会彫刻家」の言葉。自分って何？やり続けてきた仕事の本質って何？そう問い続けて来た40代を経て50代も後半へさしかかるころだった。

誰もがいくつもの役割を背負い生きている今の時代。夫、父親、小さな建築事務所の共同代表、気がおけないコミュニティでの一員。

通り過ぎてきた分岐点で立ち止まり、自らに向き合って感じていたものは自分の中にある「アート」だった。身近にいる家族や友人、若いスタッフにも時折同じものを見ていた。絵を描くとか楽器をやることとは違う深いところで生きることにつながっているものだ。

Relight Committee に参加した理由は？ 今思えばコミッティでの仲間たちとの体験を通して自分の中の「アート」を掘り出したかったのだと思う。このプロセスはこれからの10年で日常で触れ合う人たちの「アート」発見の旅にもつながっていくと信じている。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

東京観光（日常の異化）

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

八ヶ岳を主なフィールドとして働き暮らしている自分の日常は都会で暮らす人の非日常であり、都会で暮らしている人の日常は自分にとっては非日常なのだという気づきがあった。線を引くのではなく日常の延長にいつも非日常はあるのだという感覚を持った。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

「小さなアート」を多世代で共に掘り出しデザインしていく場を八ヶ岳につくるアクションを続けていくこと。在りたい自分の役割としての肩書きを考えてみると、今はギャラリスト・ガーデナー・インタープリターがしっくりくるだろうか。何かをつくりだす人や生み出す土壌への畏敬の念を持って共に走れる人、走り続ける人。

自らを統合していく10年の旅がすでに始まっていると感じる。

崩れゆく古いシステムと生まれてくるものが出会うこの時代の局面で生かされている自分。自分もその一部である社会に生まれてくる命（アート）、そこにある命に寄り添い、共に輝いていたい。憧れであり、流れを整えて美しい形ができあがることの喜び。耕す人。時に手放して待つ人。必ずやってくるものを待つことの重みに耐えれる人で在りたい。2018年、今年を本格的なアクション元年としたい。

細田東男

八ヶ岳南麓のリゾートエリアで共同代表として建築家のパートナーと建築デザイン事務所を運営している。 2018年1月現在で創業8年目に突入。現在は、八ヶ岳・軽井沢（浅間山麓）を中心に自然豊かな地を主なフィールドとして仕事をしている。中期ビジョンとして「建築デザイン技術を次世代に繋ぐ」「組織・地域・分野の境界を超えたデザイン交流」をキーワードに様々な境界線周縁部を耕し、環境に開いたシステムをオーガナイズしていくクロスボーダー・ガーデナー、ランドスケープデザイナーとして活動していく。

金江理紗

1. なぜ Relight Committee に参加したのか？

Relight Committee の存在を知った当時の私は、「どうアートと関わって生きていこうか？」という問いに取り憑かれていました。約1年半前まで美術科高校に通う生徒で、自分の考えや意思、感性を形にしたい、アートを使って問題提起したいという思いが確かにありました。でも、アートじゃ食べていけないという現実を突きつけられることが度々あり、それを理由にして、高校卒業後はアートから一旦距離を置きました。また、そもそも私にとって「アートとはなにか」を考える必要があったし、「アートの世界だけにいては語られないことがあまりにも多すぎる」と、感じていたことも大きな理由のひとつです。でも結局は、いろいろな言い訳をして、私はアートそのものから逃げました。アートと生きる自信がなかったから。それでも「アートを一生好きでいたい」という気持ちが薄れることはなく、「どうアートと関わって生きていこうか？」この問いに一度答えを出そうと決め、私は Relight Committee に参加することになります。アートの可能性を信じ、アートと向き合うことを厭わない人たちと出会い、一緒にアートについて考えることができれば、きっと、また、アートを心から好きになれる。そう思ったのです。

2. Relight Committee の活動で特に印象に残っているものとは？

私は、Relight Committee メンバーと感想や意見を共有する時間が、何よりも心に残っています。「自分の感情、感性、考えに素直になっていいんだ」。そう思えること、そうやって自分を見つめ直すことができる場所。それが私にとっての Relight Committee であり、Relight Committee が存在してきた意義でもあると思います。

3. なぜその活動が印象に残っているのか？

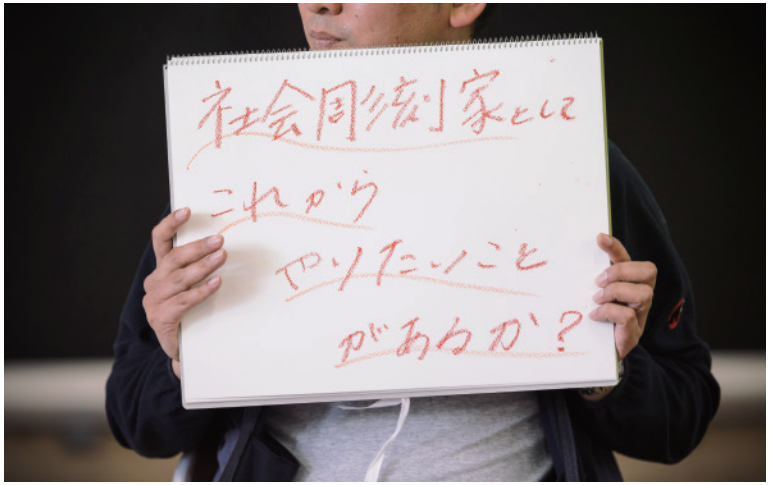
人を思いやれる想像力と、出口のない問題を突破する創造力のふたつを獲得できるアート。まさにメンバーと感想や意見を共有する時間は、アートの価値を体現していました。思いを汲み取ったり、汲み取ってもらったり。意見を尊重したり、時には疑問を呈したり……。この時間を通して、自分と向き合うことが怖くなくなりました。自分の気持ちを大事にしようと、大事にしてもいいんだと、Relight Committee が教えてくれた……そんな気がします。そして、アートと共に生きてきた私にとって、「アートが好きだ」と言える Relight Committee にいられたこと自体が、大きな財産となっています。

4.「社会彫刻家」として、今後どう活動していきたいか？

私は、あらゆる物事に対して「問い」を持ち続け、その問いを必要としている社会の誰かと、共に考えながら生きていきたいです。「社会彫刻家」をしての一歩一歩に、私は私を必要としてくれている誰かを必要としているのかもしれません。それが、今の私の素直な思いです。だから、社会の誰かと、そして自分と、向き合い続けていこうと思います。

金江理紗

Relight Committee 2017メンバー。幼少期から今日までずっと、なんだかんだいいつつも、アートと共に生きてきた。高校では現代アート、大学では CM を専攻し、制作活動を模索中。そして私の本棚は、アイデアと思考のカケラがたくさん詰まったクロッキー帳でいっぱい。考え続けることをやめられそうにない。表現することを諦められそうにない。私は私でいるために、今日も手と頭を動かそうと思う。



それぞれの中に息づく東日本大震災

東日本大震災の体験を風化させず、今一度生きることに向き合うために、「3.11が■ている。」と印刷されたワークシートのブランク部分（■の箇所）に、参加者が各々の思い・考えを書き込み、Web 上で共有する「3.11が■ている。」ワークショップ。

2015年4月、「六本木アートナイト2015」の出展作品として『Counter Void – 光の壁 –』の壁面にメッセージが綴られ、道行く人を対象に開催されたのを皮切りに、その後も Relight Salon や Relight Days、港区立笄小学校などで行われ、総参加者は200名近くに及ぶ。

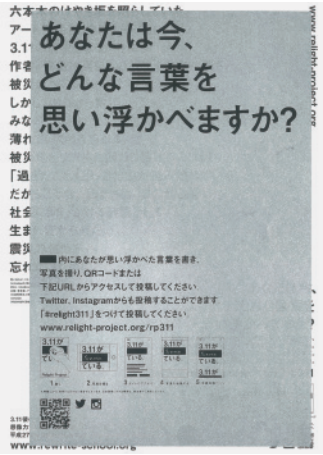
ここでは過去多くの参加者によって書き込まれ、アーカイヴされてきたメッセージを公開。併せて、もともとワークシートだったものに情報が上書きされ、少しずつ役割を更新してきた配布資料の変遷も収録する。

配布資料の変遷

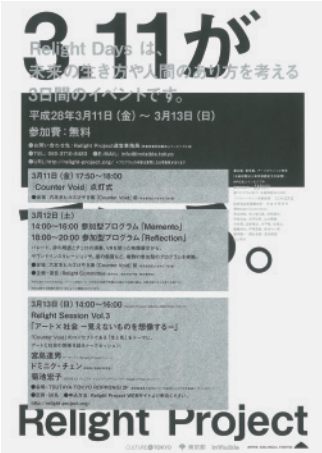
Ver. 1 & Ver. 2 表

Ver. 1 裏

Ver. 2 裏



Ver. 3 表



Ver. 3 裏

Ver. 1

六本木アートナイト2015「リライトプロジェクト」キックオフ！（4.25–4.26）で使用したワークシート。ブランク部分にメッセージを書き込む目的でつくられた。

Ver. 2

Relight Days 2016（3.11–3.13）で使用したワークシート。裏面にも情報が加えられ、情報が更新されているのがわかる。

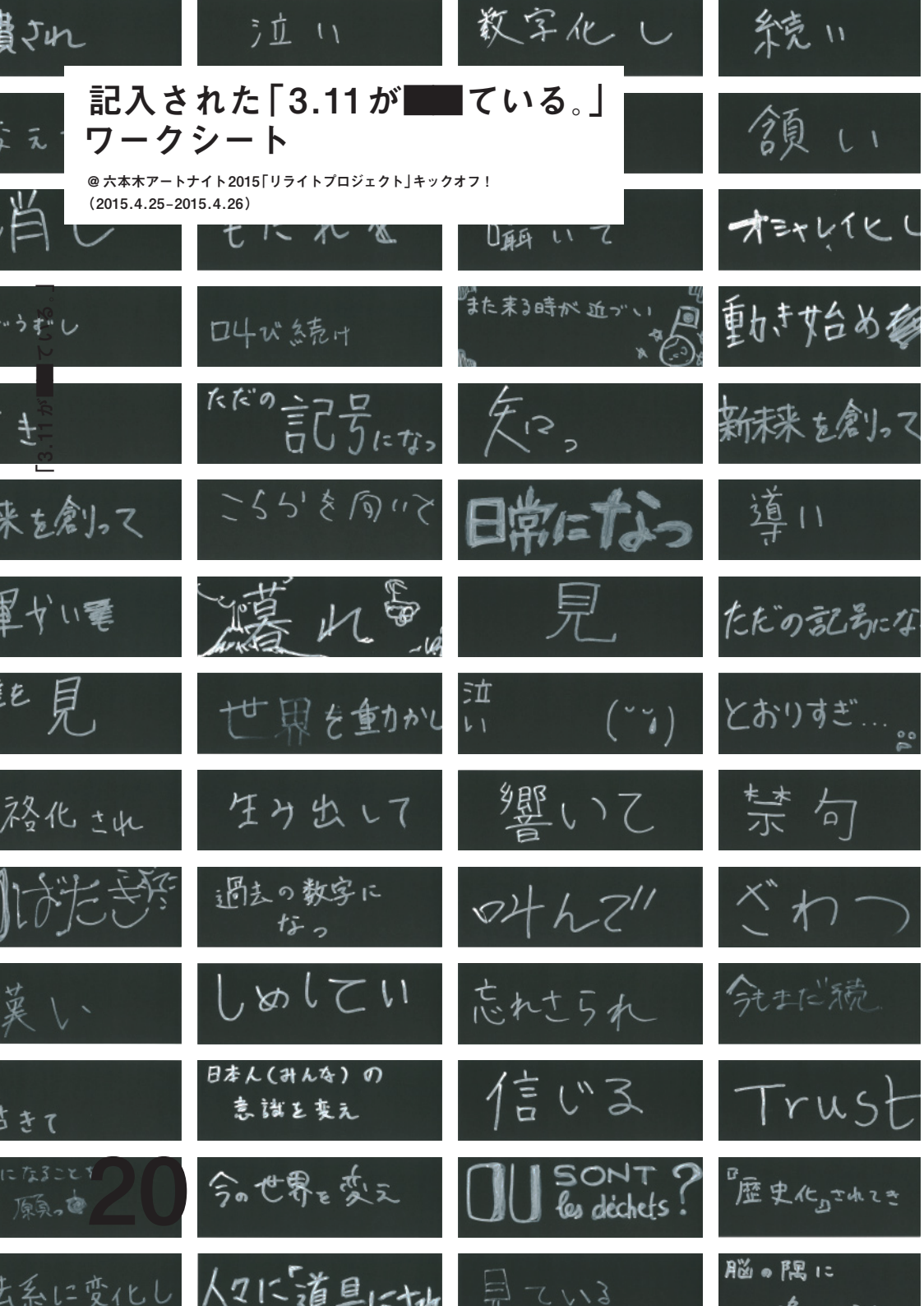
Ver. 3

Relight Days 2016（3.11–3.13）で使用したチラシ。ワークシートのデザインを活かしつつ、銀色のインクで情報を上書きされたことで、チラシへと変貌を遂げた。

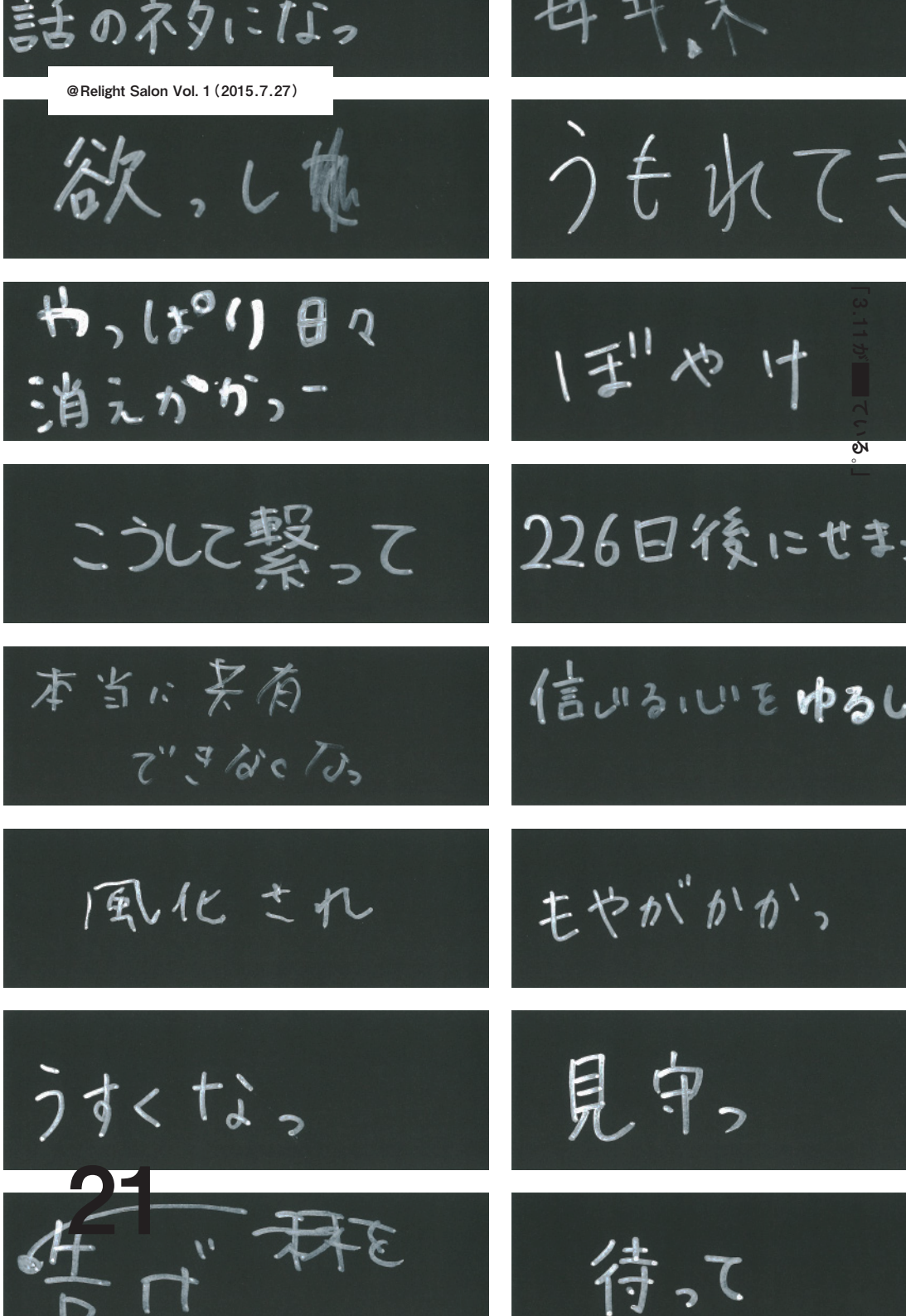
「3.11が■ている。」

記入された「3.11が■■ている。」ワークシート

@六本木アートナイト2015「リライトプロジェクト」キックオフ！
（2015.4.25–2.26）



@Relight Salon Vol. 1（2015.7.27）



@Relight Days 2016（2016.3.11–2016.3.13）

生まれている。

教えてくれ

忘れ去られ

ふっこうし始め

今も続いて

生き

絆をつないでくれ

22

しいき

まっ

いかして

他人事になっ

動かし

いえがたおれたとき
すこしづつげん気になっ

消えていっ

@港区立笄小学校ワークショップ（2016.3.3–2016.3.4）

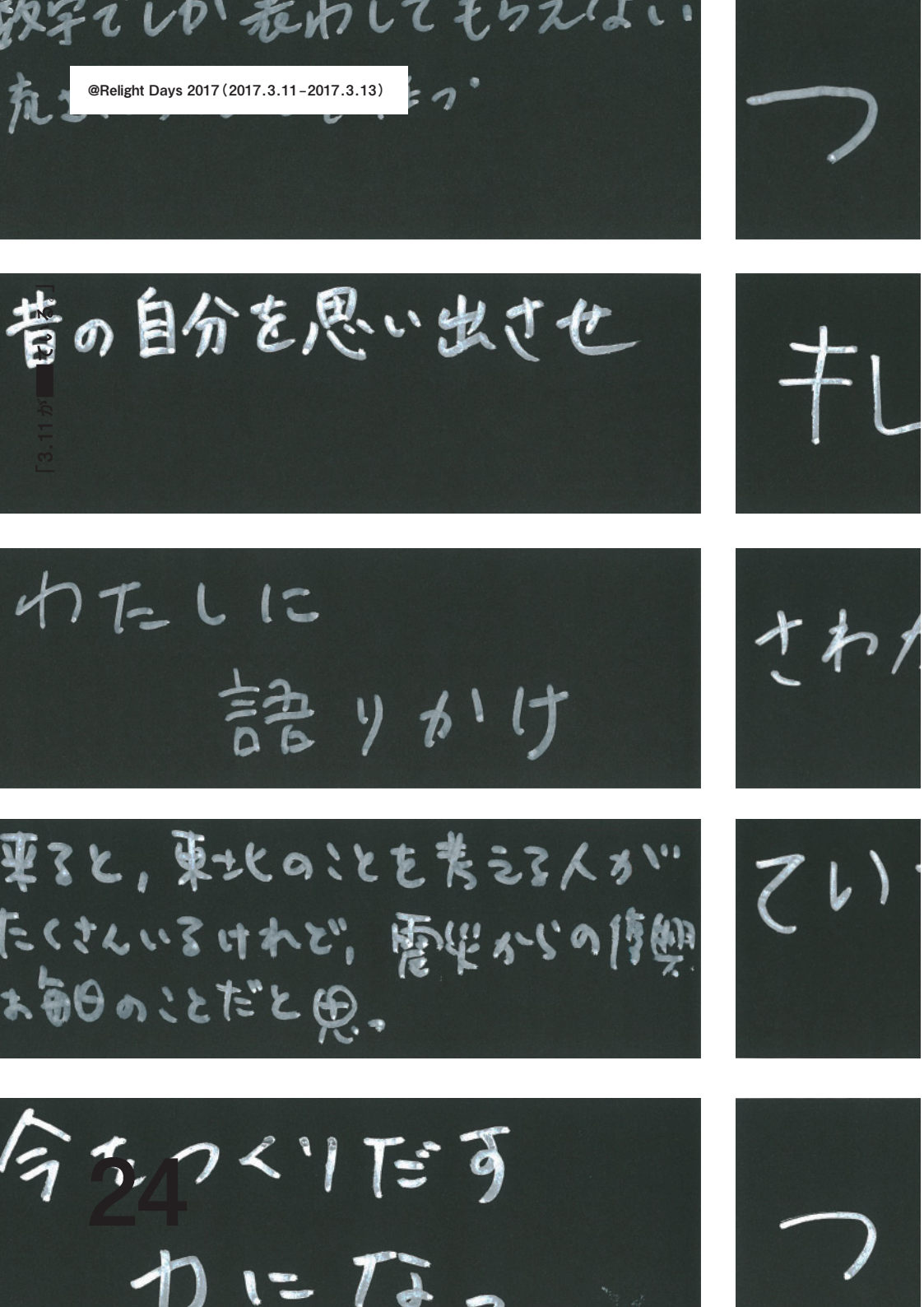
毎日をかなしみにしている

かこのことになり、忘れられてきて
かせつ住たくなどに住んでいる
人のことを覚えてないで
ふつうに生活している人がいる。

もう、
わすれてしまった人
もいる。

世界には、平和だけじゃなく、
いやなこともおきるということを、
おしえてくれている

23 だ続いている。



@Relight Days 2017（2017.3.11–2017.3.13）

「3.11が■■■■」

小学生たちが見た Relight Project

港区立笄（こうがい）小学校と Relight Project という、通常であればまったく接点のない両者が初めて交錯したのは、2016年1月28日。TSUTAYA TOKYO ROPPONGI で開催された Relight Session Vol.2「ソーシャリー・エンゲージド・アート：行動するおとこたち」だった。同トークセッションに参加していた、笄小学校の図工教師江原貴美子先生が、Relight Project の菊池宏子に声をかけたのだ。

2人の邂逅から約1カ月後の3月3日には、早くも Relight Project による笄小学校4年生を対象にしたワークショップを笄小学校で開催。それを皮切りに、ワークショップに参加した4年生が中心となって、笄小学校内に「リライトプロジェクト実行委員会」が組織されたほか、在校生による手づくりのチラシを用いた校内での告知活動が実行委員会主導で行われるなど、約1年間に渡り、Relight Project を“タネ”とした、さまざまな活動が、同小学校の中で萌芽してきた。

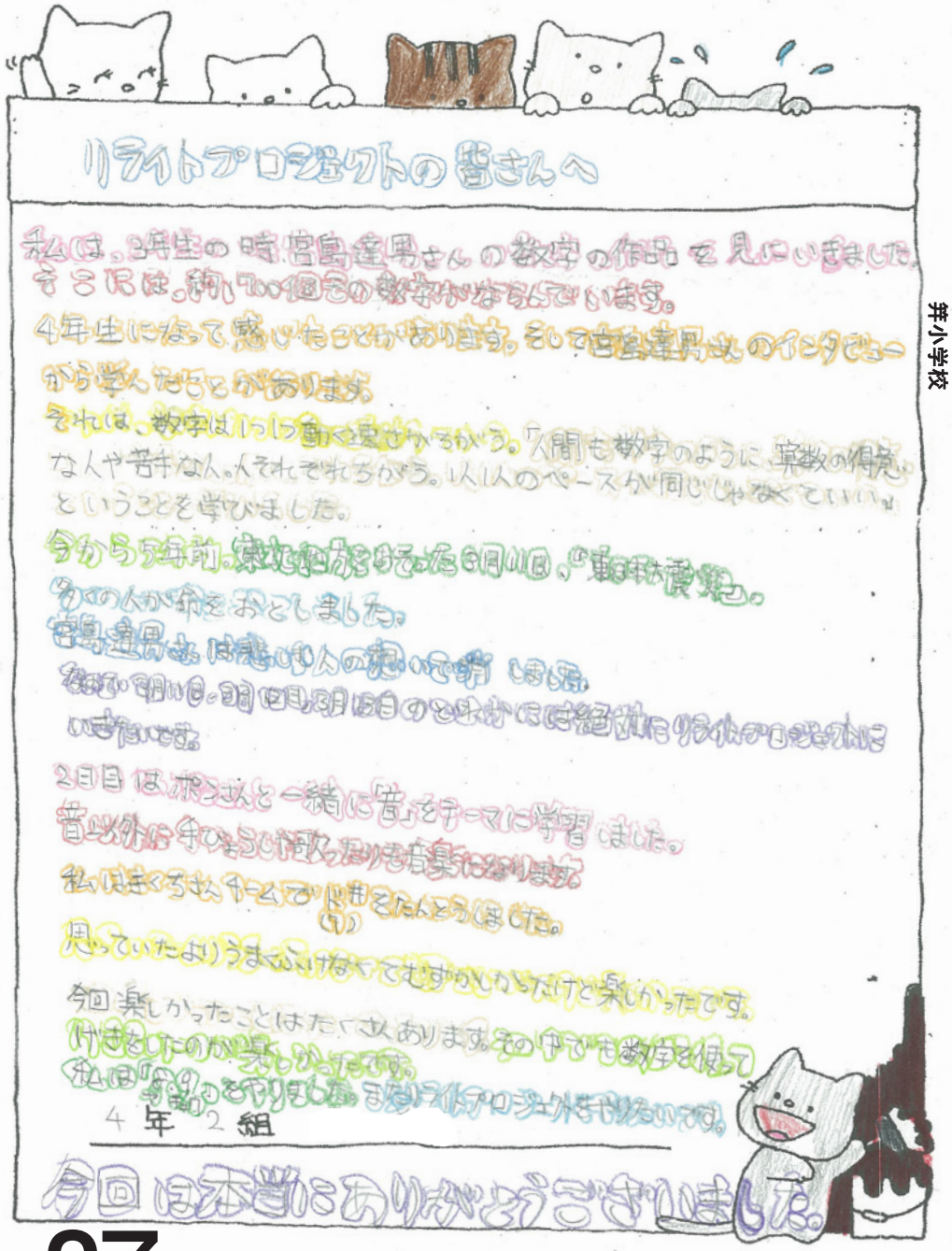
そもそも Relight Project が意図していなかったところへ、こうした地域の小学生主導による動きが活発化した背景には、前述の江原先生をはじめとした同校教諭や校長、保護者による強力な後ろ盾があったことは論をまたない。

ただ、それと同等、もしくはそれ以上に笄小学校の児童たちは、前のめりの姿勢で Relight Project に関わっていった。その記録の一端をここでは公開する。

「リライトプロジェクトのみなさんへ」

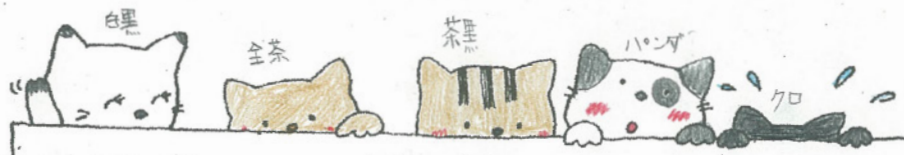
Relight Days 2016を間近に控えた2016年3月3日から4日の2日間。荓小学校の4年生を対象に、Relight Projectによるワークショップが行われた。そのワークショップに参加した小学生たちからRelight Projectへのお礼の手紙（一部）。

Photo: Hajime Kato



リライトプロジェクトの皆さんへ

私は、3年生の時宮島達男さんの数字の作品を見にいきました。
そこには、約1000個の数字がならんでいます。
4年生になって感じたことがあります。そして宮島達男さんのインタビューから学んだことがあります。
それは、数字は1つ1つ動くペースがちがう。「人間も数字のように、十人十色の得意な人や苦手な人。人それぞれちがう。1人1人のペースが同じじゃなくていい」ということを学びました。
今から5年前、東北地方をおそった3月11日、「東日本大震災」。
多くの人が命をおとしました。
宮島達男さんは悲しい人の想いを胸にしまい、
数年で3月11日、3月12日、3月13日のどれかには絶対にリライトプロジェクトにいきたいです。
2日目はポンさんと一緒に「音」をテーマに学習しました。
音以外に手びょうしを取ったりも音楽になります。
私はまくちさんチームでドミノをたんとうしました。
思っていたよりうまくいかなくてむずかしかったけど楽しかったです。
今回楽しかったことはたくさんあります。その中でも数字を使ってけいさんしたのが楽しかったです。
私は「音」をやりました。またリライトプロジェクトをやりたいです。
4年2組
今回は本当にありがとうございました。



リライトプロジェクトのみなさんへ

私は、1日目の宮島さんのDVDを見てはなしを聞いたことが心にのこりました。

宮島さんは0のところを「無」でひょうげんしていて、その「無」は「死」ということを聞いて、「ああ、これはだれもが死んでゆくっていうげんじつだ。」と思い、その後、宮島さん「でもそのあと1にもどって生まれかわる。」と言っていたので、「たしかに子どもにうけつがれるなぁ。」とも思いました。私も、死にたくはないけれど、子どもはほとんどそう思っているのかなと思います。けれど「無」を考えたら、よくぼうに満ちて死ぬ直前まで苦しむより、宮島さんの作品のように笑顔で「無」になって生まれかわりたいと思いました。

4年 2組

笠小学校

リライトプロジェクトのみなさんへ

二日間の学習を通して、ぼくはなぜ消したのかがこうかなと思いました。

1、くらやみがかっかりしてもうから。2、同じ東日本なのに、東京は明るい感じだから。なんかふしぎだから?

次は1日目のカウントです。きくちさんがいっしょにいてくれて、考えました。ろさいしょから、どんどん変えていって、1をみんなで言って、2~9はだんだん小さくしていくというふうにしました。他のグループのを見てこれもいいかもというのがあり、みんな工夫したと思いました。

次に、2日目の音にすることです。123456789というのをトランプで分けてえんそうしました。ぼくは5♡だったので、5番のソ#とソとソをひきました。重なると、とてもおもしろかったです。

カウンターウォイドについて

前に東京都現代美術館に行ったとき、目がチカチカする、赤い数字がとめっするのがありました。あれのようなものかと思ったら、やはり数字が出てきました。でもぼくはそこをただのかべだと思っていたので、びっくりしました。よく前は通るし、(5年は?)近くだけれど、5年前に通らないと思うので、見てみたいと思いました。

ガジェットについて

ガジェットは、小さいものから大きいものまであることを知りましたが、美術館にあるような小さいものばかりだと思っていたけれど、とてつもなく大きいものまであることを知りおどろきました。

宮島さんについて

宮島さんは、数字を使った作品が多いです。ポストカードにも切手(?)のところに数字がありました。とてもおもしろいと思いました。さらに、他の宮島さんの作品も見てみたいです。

4年 2組

Relight Days チラシ

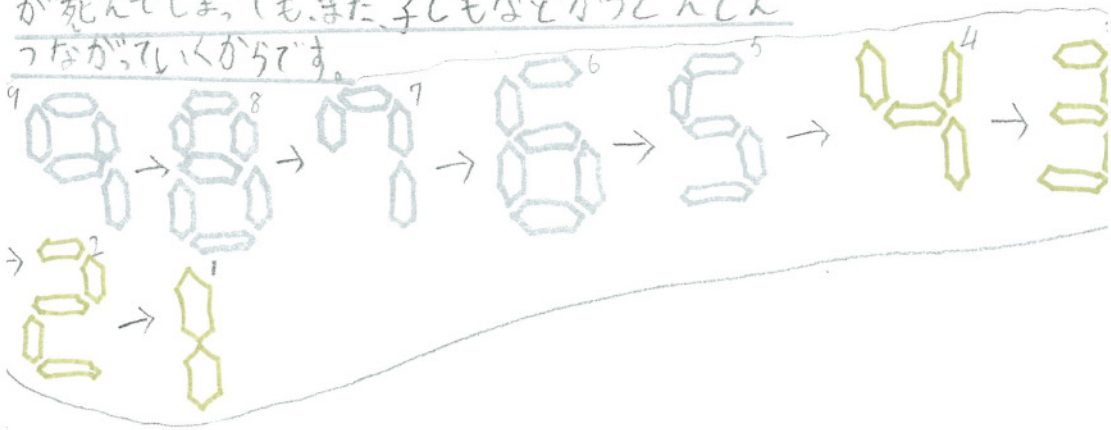
笄小学校の4年生が図工の時間につくった、Relight Days 2017のチラシ（一部）。当時の5年生（つまり、2016年の笄小学校でのワークショップに参加した学年）の有志10名ほどでつくられた組織、リライトプロジェクト実行委員会によって、Relight Days 2017の前日（2017年3月10日）、給食の時間を使って全校生徒に配布され、Relight Days についての説明・告知が行われた。

リライトプロジェクト

『カウンター・ヴォイド』

アーティストの宮島たつおさんの作品です。
六本木のテレビ朝日のかべに、数字がうつし出されます。
9→8→7→6……0
時間、ひにち…3月11日は、14:46〜23:59までがっています。
3月12日、13日は10:00〜23:59までです。

カウンター・ヴォイドは、一つ一つの数字の速さがちがいます。それは、火が一人すきなことやペースがちがうので、そのいろいろな人を数字でイメージしているからです。カウンターヴォイドは、0がありません。それは、人が死んでしまっても、また、子どもなどからどんどんつながっていくからです。



カウンターヴォイドは、去年、6年ぶりにつきました。
5年前の東日本大震災までは、ついていたのだそうです。
ぜひ、見に行ってください。

リライトプロジェクト

0は、ありません!

3月11日(土)12日(日)13日(月)
14:46～23:59　10:00～23:59 に宮島たつおさん
(アーティスト)の作品、

『カウンター・ヴォイド』

がてんじされます。それは全部数字です。9から1を全てちがう速さで人のたん生から死までを表します。数字は、6ありますぜひ見に行きましょう

昼 9 ⇒ 8 ⇒ 7 ⇒ 6 ⇒ 5 ⇒ 4

⇒ 3 ⇒ 2 ⇒ 1 ⇒ 0はない ⇒ 9 ....

夜 ⇒ ⇒ ⇒ ⇒ ⇒

⇒ ⇒ ⇒ 0はない ⇒

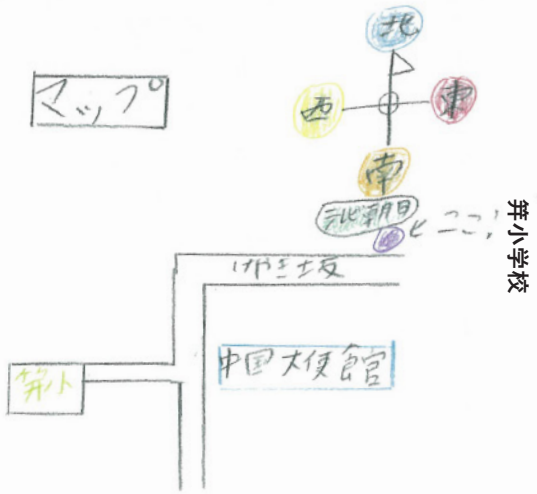
☆Kerlight Project☆

〈リライトプロジェクト〉

〈アーティスト〉
宮島達男さん

LED「発光ダイオード」を使用

マップ



〈作品名〉
「カウンターヴォイド」

〈場所、時間〉
3月11日14:46から3月13日まで。
けやき坂とテレビ朝日の近くにあります。

〈説明〉
この作品は、東日本大震災の時、光を消しました。ですが昨年、5年ぶりにつきました。
この作品は、人の一生を1へつまでで、表した物です。0が無い理由としては、0は死という意味だからです。
1、2、3、4、5、6、7、8、9、という順番で光りそしてまた1、2、3、4、5、6、7、8、9、という順番で光ります。そして、いっぱい数字があいそれぞれ早さがちがいます。

〈問題〉

基礎問題
なぜ3月11日から光るでしょう。?
①、東日本大震災の日だから。
②、宮島達男さんの誕生日だから。
③、なんと左く

発展問題
早さがそれぞれちがうのは、なんでしょう。?
①、失敗してしまったから。
②、人それぞれの早さがあるから
③、一番早いのは、どれか見つけるゲームができるようにするため。

Relight Project

（リライト プロジェクト）

場所　六本木ヒルズ
けやき坂下

日付　3月11日(土) 14.46～
3月12日(日) 10:00～
3月13日(月) 23:59

この作品には「0」がありません。1～9はあります。「0」が無いのは、宮島さんが、0は「死」という意味であると考えているからです。9がつたら一度消えて、1からまたはじまります。つまり、一度死んでも、また生まれかわる。ということです。人間は、いつかは死にます。しかし、かぎりがあるからこそ、一生けんめいがんばれるのだと思います。

「counter void」（カウンターヴォイド）は、アーティストの宮島達男さんが作った作品です。

六本木ヒルズができたころからずっと光っていました。

しかし、東日本大震災が、2011年3月11日、後午14時46分おき、東北人々たくさん亡くなられました。

宮島さんは、震災で亡くなられた人々をいのるために光を一回消しました。

しかし、昨年(2016年)、ふたたび光がつきました。震災から五年たち、人々が震災をわすれかけているからです。

宮島さんの作品の数字は、動くスピードが全てちがいます。理由は、人間にたとえると、スポーツが得意な人、図工が得意な人、なんでもみんな得意な物がそれぞれで、みんな同じだとつまらない。そんな意味がこめられています。

★Relight project★

リライトプロジェクト
LED「カウンターヴォイド」「counter void

レッツゴー Let's go!

おこなわれる日：3月11日(土)14:46(2:46)
12日(日)10:00～23:59
13日(月)

東日本大しんさいがあった日！

（その日をわすれないように）来てね！

来てね！

アーティストさん
みやしまたつお
宮島達男さんです！

ろっぽんぎヒルズでつく！（テレビ朝日かべのところ！）

すうじがうごく！そしてとてもきれい！

学級通信

笄小学校4年生の担任（当時）、黒田麻紀子先生によってつくられ、配布された学級通信。
Relight Project や Relight Days について説明がなされている。

4−1 学級通信

平成２９年３月１０日（金）
笄小学校４年１組
No.２１

リライトプロジェクトの準備を頑張っています！

３月１３日月曜日にリライトプロジェクトに参加します。リライトプロジェクトは東日本大震災のことを忘れずにそして今生きることを大切に一人一人が考えるプロジェクトです。その一つの取り組みとして人々の心に問いと気付きを生み出す装置して、２０１６年３月１１日、５年ぶりに六本木ヒルズにある「Counter Void」に光が灯りました。子供たちの住む地域にあるこの作品を通して学び、子供たちは生きることについて考えました。６日月曜日の発育測定でも命についての学習を行いました。二分の一成人式を通して、今までの１０年間を振り返り、そして植樹で命について考え、今、子供たちは子供たちなりに生きることについて考えリライトプロジェクトのチラシを図工で作成しました。（裏面に全校に配布したチラシを載せます。また、子供たちが作成した個人の作品は本日持ち帰ります。）また、「Counter Void」の作者アーティストの宮島達男さんに当日お会いするのでお礼として谷川俊太郎さんの「生きる」の詩を４年生全員に言葉を募集し、作成しました。当日は、作品の前で群読をします。（右にありますのが、子供たちが考えた詩です。）

「生きる」

笄小学校４年リライトプロジェクトバージョン

※生きる　生きているということ　今生きているということ
それは　のどがかわくということ　水を飲むということ
いきをすること　心臓が動くということ
ご飯がおいしいということ
それは　学校に行くこと　あいさつをすること　勉強をすること
スポーツをすること　友達と仲良く遊ぶこと
時にはケンカをすること　仲直りをすること
たくさんの人と出会うこと　新しいことに挑戦すること
あきらめないこと　１０歳ということ
それは　笑うこと　幸せだと思うこと　苦しい時もあるということ
死があるということ　命をつなぐということ
今この時が過ぎていくこと　宮島達男さんに出会うこと
リライトプロジェクトに光がつくこと
自分の時間を使うということ
残りの時間を一生懸命に生きること
全ての人に感謝すること　ありがとうございました

<来週の予定>

	１３ 月	１４ 火	１５ 水	１６ 木	１７ 金
1	国語	社会	国語	国語	算数
2	社会	算数	算数	社会	国語
3	図工	音楽	国際	国際	国際
4	図工	体育	体育	音楽	道徳
5	図工	国語	社会	算数	図工
6		クラブ		国語	図工

月曜日・・・全校朝会、リライトプロジェクトへ参加
委員会（代表委員のみ）
水曜日・・・さわやかタイム
金曜日・・・児童集会、４年１組保護者会

<お知らせとお願い>

○３月１３日（月）の持ち物として折り畳み傘を持ってくるよう子供たちに伝えております。ご準備よろしくお願いいたします。
○３月１７日（金）１３時４０分より２階家庭科室で４年１組保護者会を行います。１年間の学習や生活の様子などについてお話をします。

Relight Days 感想

Relight Days 2017の3日目、笄小学校4年生の児童たちは宮島達男氏とともに『Counter Void – 光の壁 –』を見学した。その後、笄小学校から Relight Project へ届けられた、お礼の手紙（一部）。

リライトプロジェクト

港区立笄小学校
4年　1組
名前

みんなで「カウンターヴォイド」を見て
・宮島達男（みやじまたつお）さんへ
・リライトプロジェクトのみなさんへ

宮島達男さんへ
ぼくは、リライトプロジェクト
のカウンターヴォイドを見て
思ったことは、すごくきれい
だということです。
昼ではうっすらしか見えな
かったので夜に見てみた
いです。
ぼくのスピードはすこし
ゆっくりなほうだと思います。

リライトプロジェクト	港区立笄小学校
みんなで「カウンターヴォイド」を見て ・宮島達男（みやじまたつお）さんへ ・リライトプロジェクトのみなさんへ	4年　1組 名前

先日はおいそがしい中、じかんをいただき、じゅぎょうありがとうございました。ぼくは6年前、ようちえんのねんしょうでした。あの時のことは、今でもおぼえています。とてもこわかったけど、自分よりもっとつらい人がいるんだなと思うと、とてもびっくりします。これからも命を大切にしたいと思います。

ありがとうございました。

リライトプロジェクト	港区立笄小学校
みんなで「カウンターヴォイド」を見て ・宮島達男（みやじまたつお）さんへ ・リライトプロジェクトのみなさんへ	4年　1組 名前

カウンターヴォイドを見せてくれてありがとうございます。東日本大しんさいのことをわすれずにそして今生きていることを大切にひとりひとりが考えるプロジェクトだと思いました。「生きる」のリライトプロジェクトバージョンは、どうでしたか。「変わらないもの」と言う歌もどうでしたか。感どうしましたか。私は家族みんなにリライトプロジェクトのことをおしえたいと思います。来年もテレビ朝日のかべのカウンターヴォイドをじっくり見てみたいと思います。

リライトプロジェクト	港区立笄小学校
みんなで「カウンターヴォイド」を見て ・宮島達男(みやじまたつお)さんへ ・リライトプロジェクトのみなさんへ	4年 1組 名前

笄小学校

今日(3/13(月))は、リライトプロジェクトについて、いろいろ教えて下さって、ありがとうございます。わたしは宮島さんが、どのような気持ちで作品を作ったのかが分かりました。また黒→1〜9かと思いましたが、9〜1黒という事を知りました。3/11になると、みんなは、「あっ、六年前は、震災だったんだ」と思うけれど、わたしは、ちがいます。なのでこのカウンタープロジェクトを見ると、すごく悲しい気持ちになります。

ありがとうございます。

リライトプロジェクト	港区立笄小学校
みんなで「カウンターヴォイド」を見て ・宮島達男(みやじまたつお)さんへ ・リライトプロジェクトのみなさんへ	四年一組 名前

笄小学校

I think it was very important how he explained to us about the counter void and how it works.

I think the Relight project helpt us learn many important things.

リライトプロジェクト

港区立芝小学校 4年 2組

名前

みんなで「カウンターヴォイド」を見て

・宮島達男(みやじまたつお)さんへ

・リライトプロジェクトのみなさんへ

お忙しい中、リライトプロジェクトについて教えて下さりありがとうございました。

ぼくたちは、図工の時間などで、四コママンガや本でリライトプロジェクトについて書いたり、チラシをつくり、それを1~6年生に伝えて、リライトプロジェクトについてもっと知ってもらおうとやりました。

ぼくは2003年に、六本木ヒルズができそのときについたことを知りました。東日本大震災のとき、亡くなった方をちんこんするため消したと心に残りました。

ぼくはカウンターヴォイドを見て色々な人がいて、ビジネスマンの人が忙しくしている人が想象できました。ぼくのペースは、10秒に一回数字が変わるというものです。

今日はどんなことも知れたので感謝しています。

リライトプロジェクト

港区立芝小学校 4年 2組

名前

みんなで「カウンターヴォイド」を見て

・宮島達男(みやじまたつお)さんへ

・リライトプロジェクトのみなさんへ

私は、今回この授業があって、本当に良かったと思います。

そして、命の大切さを学びました。宮島達男さん、森美術館の方々、プロジェクトの皆様、このような機会をあたえて下さり、とても感謝しています。

宮島さんの作品は、とても工夫されていてすごくきれいでした。

なぜ、カウンターヴォイドがあそこにあるか、そして作品にはどんな意味がこめられているか、宮島さんがいたからこそわかりました。今回教えてもらったことは、もしそこに宮島さんがいなかったらわかりません。「宮島さんと出会うこと」ができて本当に良かったと思います。私達の「生きる」の詩と「変わらないもの」という歌はどうでしたか？私自信ではせいいっぱい出しきりました。私はカウンターボイドを通して今もこの手紙をかきながら改めて命の大切さがわかりました。

今回は本当にありがとうございました。

リライトプロジェクト	港区立芝小学校
みんなで「カウンターヴォイド」を見て ・宮島達男（みやじまたつお）さんへ ・リライトプロジェクトのみなさんへ	4年　2組 名前

今回は、ぼくたちをリライトプロジェクトに参加させていただき、ありがとうございました。宮島達男さんのカウンターヴォイドを見て、一つひとつの数字が「人の速さは一人一人ちがう」と教えてくれました。また「人」ということについて改めて考えられました。考えてみて、速さというのは人の個性なんだなと思いました。ぼくの速さも考えてみたら速くもないおそくもないふつうの速さだと思いました。これからは人の速さというものを考えて、友達とせっして仲良くなりたいです。

リライトプロジェクト	港区立芝小学校
みんなで「カウンターヴォイド」を見て ・宮島達男（みやじまたつお）さんへ ・リライトプロジェクトのみなさんへ	4年　2組 名前

私は、カウンターヴォイドを見て思った事があります。それは数字を見て思ったことです。数字がカウントしていくのに、速いものや、遅いもの、いつもの時の流れを感じるものがあってそれを人間で例えれば、色々な個性があったり、仕事だったりすると思いました。色々な感情や物を持ちながら人は生きていくということを知りました。また、来年も光がつくかがわからないけど、リライトプロジェクトを、世界中の人達にどんどん広めていきたいなと思いました。そして東日本大震災を忘れずに私は、生きていこうと思いました。今回はありがとうございました

Ways to End Public Art
by Relight Project
2: Recollection - 回想 -

著者
Relight Project

編集
桜井祐（TISSUE Inc.）室内直美（NPO 法人インビジブル）

アートディレクション
長嶋りかこ（village®）

グラフィックデザイン
真崎嶺、岡崎真理子（village®）

写真
丸尾隆一

印刷
グラフィック、繁岡美術

発行日
2018年3月11日

発行
アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073
東京都千代田区九段北4丁目1-28九段ファーストプレイス8階
TEL: 03-6256-8435／ FAX: 03-6256-8829
URL: www.artscouncil-tokyo.jp

本書に関するお問合せ先
NPO 法人インビジブル
〒103-0012
東京都中央区日本橋堀留町2-4-5 長谷川ビル5階
TEL: 050-3710-8483／ E-mail: info@invisible.tokyo
URL: invisible.tokyo

禁無断転載・複製
© 2018 ARTS COUNCIL TOKYO All Rights Reserved.
Printed in Japan

Relight Project

主催
東京都、アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、NPO 法人インビジブル
URL: http://relight-project.org

リライトプロジェクトは、「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団) が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。

www.artscouncil-tokyo.jp